

# ノダの提示方法に関する一案

## —メタファーを用いた意味・機能提示

藤城浩子

### ✦要旨

本稿では、ノダの意味・機能を日本語学習者に提示する際にメタファーを用いる方法を提案し、導入例、練習例を示した上で、期待される効果について考察している。ドアの向こうに隠れていて見えないものを、ドアをひらいて見せる／見る／見ようとするという行為は、ノダが示す「まだ明かされていない既定の事態とは何かを種明かしする」というニュアンスと重なる。このようなドアのイメージを、ノダの意味・機能と重ねて提示することは、言葉による用法解説を補い、ノダ理解の助けとなると考えられる。このような提示方法から期待される効果として、①ノダのおおまかなイメージが体感できる、②説明の難しいニュアンスを伝えることができる、③様々な用法に共通するイメージが得られるという3点を挙げている。

### ✦キーワード

ノダ、意味・機能の提示、メタファー、イメージ

### ✦ABSTRACT

This paper proposes methods of using metaphors to present the meanings and functions of “*noda*” to learners of Japanese. The paper exhibits examples of how to introduce and practice “*noda*,” and deliberates on anticipated effects. The acts of revealing, seeing and trying to see what is hidden behind a door overlap the subtle but basic image of “revealing what a prearranged hidden state of things is” presented by “*noda*.” Presenting the image of a door in this way, by overlapping it with the meanings and functions of “*noda*,” surely will supplement the explanation of its usage with words, and help learners understand its meanings and functions. The anticipated effects by these methods of presentation are: 1) enabling learners to feel the overall image of “*noda*,” 2) enabling learners to communicate nuances that are difficult to explain, and 3) enabling learners to obtain an image that is common in various usages.

### ✦KEY WORDS

*noda*, presenting meanings and functions, metaphor, image

## A Study on How to Present *Noda* Presenting meanings and functions by using metaphors

HIROKO FUJISHIRO

# 1 はじめに

文末のノダは日常的に頻繁に用いられるが、ノダが担う意味・機能は抽象的で、状況や文脈によって多様な表現効果が実現される。また、それらの表現効果に共通する意味が見出しにくく、なかなか正体が見えない。そのため、ノダは、日本語学習者にとっては習得が困難な文型の一つであり、教師にとっても説明が難しい。本稿では、ノダの意味・機能を言葉だけで説明することには限界があると考え、それを補う方法として、メタファーを用いた提示方法を提案する。

レイモンド (2008: 129-130) は、認知科学の立場から、メタファーは「字義的言語を用いては伝えるのがきわめて難しいであろう考えの表現方法を提供する」、「著しく簡潔な伝達手段を与えてくれる」、「我々が現象的な経験を鮮明に捉える手助けをしてくれる」としている。メタファーにこのような力があるとすれば、メタファーを用いた意味・機能提示は、字義的意味による説明の限界を補う有効な手段となりうるのではないだろうか。

以下、2節で本稿の問題意識を示し、3節で本稿でのノダの意味・機能の捉え方を示す。4節では、ノダの意味・機能をドアに見立てて提示するという方法を提案し、5節で日本語クラスでの使用例を紹介する。その上で、6節で期待される効果を示し、7節でまとめを行う。

なお、本稿が考察の対象とするのは、文末のノダ、音便化したンダ・ンデスなど、疑問形のノカ・ノデスカなど、丁寧体のノデス・ンデスなどである。ノデハナイ、および、ノデハナイを前提とし、ノデハナイと対になるノダは、特有の振る舞いをするため<sup>[註1]</sup>、考察の対象に含めない。

## 2 本稿の問題意識

日本語教育の現場でノダを扱っていると、様々な疑問や困難を感じる。ここでは、①用法解説の意味を的確に捉えることが学習者にとっては難しい、②用法が多様で共通点が見出しにくい、という2点を挙げたい。

まず、①についてだが、初級の授業では、ノダを「理由」や「説明」の表現として扱うことが多い。たとえば、筑波ランゲージグループ (1991) には、“Sentences ending in ～んです are commonly used for giving or requesting an explanation or reason.” との解説がある。

しかし、「説明」という表現は意味の幅が広く、どのようなものがノダとなじむのか、判断が難しい。たとえば、(1) は作文の冒頭部だが、これを書いた学習者は、これを「説明」だと考えてノダを用いたと言う。

(1) (作文の冒頭で)

#私のまちはボンというまちなんです。<sup>[註2]</sup> (学習者の作文に基づいた作例)

逆に、「理由」という表現は意味の幅が狭く、ノダが用いられていても理由と言にくいケースも多い。たとえば、(2) のノダ文も、厳密には理由を述べているとは言にくい、解説用語をきちんと理解しようとする学生ほど、「これは理由か？」と悩むことになる。

(2) (ケーキを手に)

「これ、どうぞ。昨日作ったんです」 (教室活動に用いた作例)

また、「ノダは強調のために使う」と捉えている学習者も多く<sup>[註3]</sup>、気持ちを込めて強く言いたいときにノダを用いるというケースにしばしば出くわす。(3) は学習者の発話だが、ノダの使用意図を聞いてみると、とても楽しかったから強く言いたかった、とのことであった。

(3) (ワークショップの最後に一言ずつ感想を述べる場面で)

#今日は、楽しかったんです！ (学習者の発話)

これらの例は、解説の用語を正しく理解する難しさを物語っている。

次に、②の点だが、ノダには、「理由」「説明」以外にも様々な用法や表現効果が指摘されており、その共通点は学習者には見えにくい。以前、学習者に

「ノダは留学生のnightmareです」と言われたことがある。「いろいろな意味で出てきて、本当の意味がわからない。confusing」とのことであった。用法・表現効果が多様で、その正体が見えにくいことが、学習者の負担となっていると考えられる。

本稿は、以上のような問題意識に基づき、言葉による用法解説を補う方法の一つとして、メタファーを用いた提示方法を提案する。

なお、ノダ提示の際に動きを伴うメタファーを用いる方法は、既に今村(2007)が提案している。今村(2007:42)は、ノダは発話内容を「相手に投げかけ、しっかり手渡すイメージ」として、これを反映したジェスチャーを用いた提示方法を示している。しかし、「発話内容を相手に投げかけ、しっかり手渡す」というイメージは非常に抽象的で、これを初級学習者にどう正確に伝えるかという点で疑問が残る。本稿では、導入段階でも使用できる提示方法を工夫することを目標としたい。

### 3 本稿でのノダの意味・機能の捉え方

ノダの意味・機能については、田野村(1990)の立場を批判的に踏襲する。田野村(1990)は、ノダの働きは「背後の事情」または「実情」を示すことにあると指摘し、そこから「承前性」、「披瀝性」、「既定性」、「特立性」という特徴が生まれるとしている。このうち、「既定性」については、三上(1953)以来様々に論じられ、しばしば「既定性」を示すことがノダの中核的意味・機能とされてきた。しかし、野田(1997)、名嶋(2007)が指摘するように、「既定とは何か」があいまいなままである。

田野村(1990:28)は、ノダは「承前性」や「既定性」という意味特性を表すため、(4)のように「突発的に生じた事態や事態の兆候を認識して、直ちにそのことを言語化するような場合」には用いられないとしている。

(4) あっ、{動いた／<sup>?</sup>動いたんだ}。<sup>[註4]</sup> (田野村 1990: 28)

これに対し、名嶋(2007:68)は(5)のような例を挙げ、「突発的に生じた」予

想もしない事態に遭遇し、「直ちにそのことを言語化」している場合であってもノダが用いられると指摘している。

(5) (出かけに外に出て) あっ、雨が降っているんだ。(名嶋 2007: 68)

名嶋はさらに、ノダ文「雨が降っているんだ」でも、非ノダ文「雨が降っている」でも、「雨が降っている」という事態は発話の時点で既に成立している、つまり、既定のことであり、事態の「既定性」を表すのはノダ特有の特徴ではないと指摘している。

本稿では、ノダ文の特徴は、「事態が既定であることを表す」点にあるのではなく、「まだ明かされていない(または、これまで明かされていなかった)既定の事態<sup>[註5]</sup>が存在する」という意識を前提とする点、そのような意識を下敷きにして、「その既定の事態とはどのようなものか」について、種明かしというニュアンスを込めて述べる<sup>[註6]</sup>という点にあると考える。

(6) 本稿で捉えるノダの特徴：ノダは、「まだ明かされていない(または、これまで明かされていなかった)既定の事態が存在する」という意識を前提とし、そのような意識を下敷きにして、「その既定の事態とはどのようなものか」について、種明かしというニュアンスを込めて述べる際に用いられ、そのような述べ方を表す。

(5)を(6)に従って捉えると、雨に話者の注意が向けられた時点で、「(今の空模様について)それまで明かされていなかった既定の事態が存在していた」という意識が浮かび上がったと考えられる。そのような意識のもとで、「その既定の事態とはどのようなものか」というと、「雨が降っている」という事態だ」という種明かしが話者の中で起こったこと、それに伴って新たな認識が生じたことが表されている。これに対し、非ノダ文は、「雨が降っている」という事態の成立そのものを表している。

本稿では、ノダに(6)のような特徴を想定することで、田野村(1990)の指摘する「背後の事情」や「実情」などの特徴を、より統一的に捉えることがで

きると考える。たとえば、(2) では、ケーキが差し出された時点で、聞き手に「何のケーキ？」などの疑問が浮かぶことが予測される。そこで、話者は「(ケーキについて) まだ聞き手に明かされていない既定の事態が存在する」という意識を下敷きにして、「その既定の事態とはどのようなものか」というと、昨日作ったという事態だ」と種明かししていると考えられる。これが「背後の事情」を表す用法であり、「昨日作った」は、「ケーキを差し出す」ことの「背後の事情」として示されている。

ここでは、「ケーキを差し出す」という先行する事態があるからこそ、「(ケーキについて) まだ聞き手に明かされていない既定の事態が存在する」ということが意識され、そこから「聞き手に明かされていない既定の事態とはどのようなものか」という、種明かしされるべき問題が浮かび上がってきている。この点で「承前性」がある。

一方、次の(7) では、何が、「まだ明かされていない既定の事態が存在する」という意識を浮かび上がらせたのかは明らかでない。

(7) (トコロデ) お酒はよく召し上がるんですか? (田野村1990:7)

田野村(1990:7)は(7)のような例について、「背後の事情を表す用法における $\alpha$ <sup>[註7]</sup>がその内容の具体性を失ったところに成立し定着している」と述べている。しかし、 $\alpha$ が内容の具体性を失っているにもかかわらず、これを、 $\alpha$ の「背後の事情」を表す用法の延長線上で捉えるのは、やや無理があるのではないだろうか。本稿では、(7)では、「まだ明かされていない既定の事態が存在する」という意識を浮かび上がらせた事態 $\alpha$ は特に見あたらないものの、「まだ明かされていない既定の事態とはどのようなものか」について種明かしというニュアンスを込めて発話がなされるという点では、(7)も(2)と同様だと考える。つまり、「背後の事情」も、「実情」も(6)のような共通の特徴を持つと考える。

(7)は、問いかけ文であるため、「(聞き手の嗜好について) まだ話者には明かされていない既定の事態がある」という意識を下敷きにして、「その既定の事態とはどのようなものか」、「お酒はよく召し上がる」というものでよいか」と、

種明かしを求めていると考えられる。この場合、ノダは、「背後の事情」を表すという機能を果たすのではなく、「まだ明かされていない既定の事態があり、認識にギャップがあるから、ちょっと教えてください」といったニュアンスを、発話に添えていると考えられる<sup>[註8]</sup>。

なお、(6)の「まだ明かされていない既定の事態とは何かを種明かしする」というニュアンスは、田野村(1990)の指摘する「披瀝性」に繋がる。また、「特立性」については、本稿の考察の対象外であるノデハナイ、および、ノデハナイと対になるノダに見られる特徴であると考えられる。

田野村(1990)と本稿の対応関係をまとめると、表1ようになる。4節で提案するドアのイメージとの対応関係も加えて示す。

## 4 ドアのメタファーとノダ

本稿では、(6)に示した「種明かし」という述べ方を、ドアをひらいてその

表1 田野村(1990)と本稿、および、ドアのイメージの対応関係

田野村の用語	本稿の捉え方	ドアのイメージ
「既定性」	ノダの特徴は、「既定性」を表すことにあるのではなく、「まだ明かされていない既定の事態が存在する」という意識を前提とする点、その既定の事態とはどのようなものを明らかにする／しようとする点にある	ドアの向こうの“the fact behind”への意識、ドアをひらいて中を見せる／見ようとするなどの行為
「背後の事情」「実情」	「背後の事情」と「実情」の違いは、「まだ明かされていない既定の事態が存在する」という意識を生むきっかけとなる事態 $\alpha$ が特定されるか否かの違い	ドアの外側に事態 $\alpha$ が明確に意識されているか否かの違い
「承前性」	「背後の事情」用法の場合、先行する事態 $\alpha$ を受けて、まだ明かされていない既定の事態 $\beta$ の存在が意識される点で「承前性」がある	事態 $\alpha$ がきっかけとなり、事態 $\beta$ へのドアが立ち上がる
「披瀝性」	「種明かし」というニュアンス	ドアを開けて中を見る／見せる／見ようとする行為
「特立性」	ノデハナイの特徴(本稿の考察の対象外)	——

向こうにあるものを見せる／見る／見ようとするという行為に見立てたメタファーを提案する。ドアは、その向こう側の見えない世界を、こちら側の世界から隔てるものである。これを利用し、ドアをひらくと、その向こうのまだ明かされていない既定の事態“the fact behind”<sup>[註9]</sup>が明かされると考える。図1はその具体例、図2は教材の使用例である。

差し出されたケーキを前にした聞き手には、「何のケーキ？」などの疑問が浮かぶことが予想される。そこで、話者は「(ケーキについて) まだ明かされていない既定の事態が存在する」という意識を表すドアを持ち出し、そのドアの前にケーキを貼り付ける。これが事態 $\alpha$ となる。ドアのこちら側には「どう

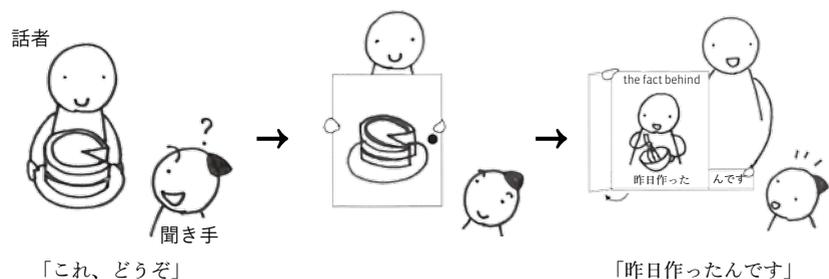


図1 ドアのメタファー（導入例）

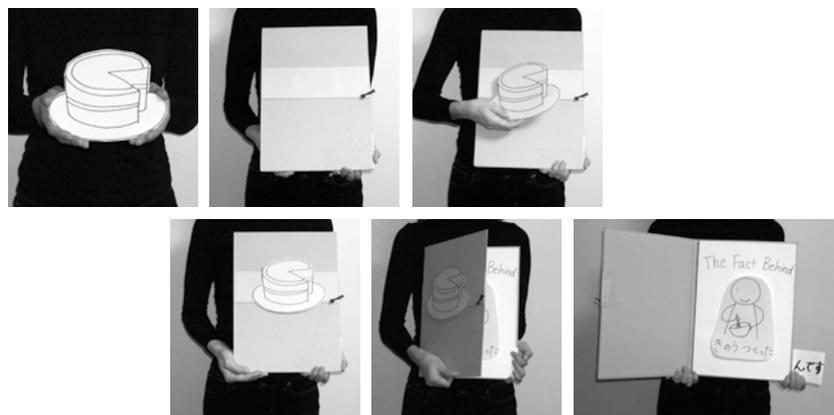


図2 ドアのメタファーの教材使用例

ぞ」と差し出されたケーキが見えており、話者と聞き手の共通認識となっている。ドアの裏には何かがあるが、それは聞き手には見えていない。つまり、ケーキが「どうぞ」と差し出されたことの裏には、何らかの別の事態が存在するのだが、それが何であるかは聞き手にはわかっていない。これは「まだ明かされていない既定の事態の存在への意識」を示唆する。話者は、この状態から、ドアをひらいて中を見せ<sup>[註10]</sup>、ドアの向こうにある事態を提示するわけだが、ドアをひらいて中を見せる行為は、「種明かし」という述べ方や「披瀝性」と対応している。さらに、ドアを隔てて事態 $\alpha$ と事態 $\beta$ が前後に隣接しており、ドアを開けるとその裏にある事実（“the fact behind”）が明らかになるという構造は、「背後の事情」を表すという特徴と対応している。なお、図1は「背後の事情」を表す用法の例だが、後述する(8)～(10)は「実情」を表す用法だと考えられる。この場合、ドアの前にある事態がどのようなものであるかが、特に意識されていないと捉えることができる。

## 5 授業での使用例

ここでは、ドアのメタファーの使用例を示すため、導入と練習の例をいくつか紹介したい。

### 5.1 導入例（図1の絵を使用）：

- ① 教師は、ケーキの絵を持ち、「これ、どうぞ」と学習者に差し出す。学習者が「おや、何のケーキ？」と思っているところに、図1のようなドアを持ち出し、ケーキの絵をドアの前に貼り付ける<sup>[註11]</sup>。
- ② 教師は、図1のようにドアをひらき、ドアの向こうにある“the fact behind”を見せながら、「昨日作ったんです」と言う。
- ③ ドアをひらいて“the fact behind”を明かすような態度で文を述べる際に、ノダ（「～んです」）を用いることを説明する。

## 5.2 導入後の簡単な練習例A (図3の絵を使用) :

- ① 教師が話者となり、図3の発話例を示す。まず、「すみません、明日、休ませていただけませんか」と言う。そこで聞き手に生じるであろう「それはどういうこと?」という疑問を予測しつつ、ドアを取り出す。ドアに「明日休ませていただけませんか」という科白を貼り付け、ドアをひらきながら、その裏には「父が日本に来る」という既定の事態があることを示す。同時に「実は、父が日本に来るんです」と言う。
- ② ①で導入した「すみません。明日、休ませていただけませんか。実は、父が日本に来るんです」という発話の口慣らしをする。
- ③ 「すみません。明日、休ませていただけませんか」という部分は固定し、事情をそれぞれの学習者が考える。考えた事情は文字や絵にかき、着脱可能な粘着材でドアの向こう側につけられるようにしておく。
- ④ それぞれの学習者がドアを持ち、「すみません。明日、休ませていただけませんか。実は、～んです」という発話を、実際に「ドアをひらいて中を見せる」という動作を行いつつ練習する。

## 5.3 導入後の簡単な練習例B (図4の絵を使用) :

- ① 教師は、図4のB役となり、「Aさん、なんだか、うれしそうですね。どうしたんですか」という発話を紹介する。この際、うれしそうなAに対する「何だろう?」という気持ちを示しつつ、ドアを取り出し、満面の笑顔の図をドアの前に貼り付ける。そのドアをA役の学習者に持たせ、「どうしたんですか」と言いながら、ドアの中が気になっている、中が見たいという素振りをする。必要に応じて、ドアの向こうの“the fact behind”がどんなものかを知りたいときは、「んですか」という問いかけを使うことを説明する。
- ② ①の発話がスムーズに言えるようになったら、教師が満面の笑顔の絵を自分の顔の前に持っていくなどして、「なんだか、うれしそうですね。どうしたんですか」という問いかけを促す。この問いかけが得られたら、次に、ドアをひらきながら、「実は、今日は〇〇のコンサートがあ

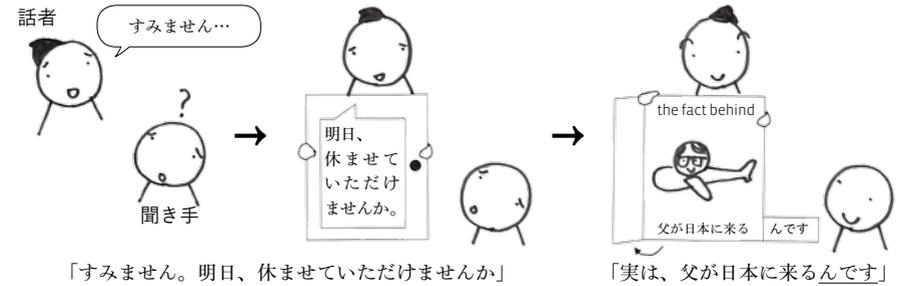
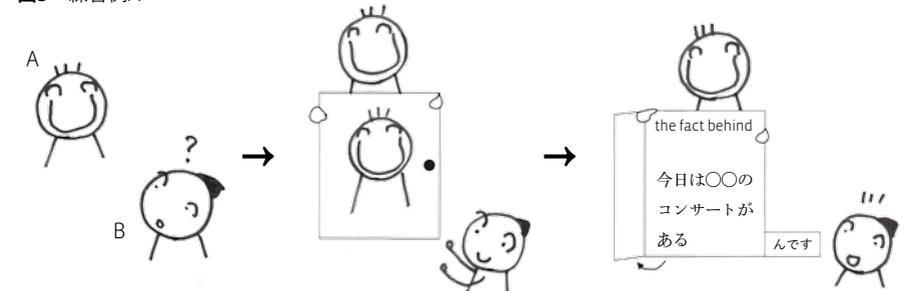


図3 練習例A



(うれしそうなAとそれを見て「何だろう?」と思うB)

B:「なんだか、うれしそうですね」  
(Aに図のようなドアを持たせ、中を気にするような素振りで)  
「どうしたんですか」

A: (ドアをひらきながら)「実は、今日は〇〇のコンサートがあるんです」

図4 練習例B

るんです」と答える。さらに、満面の笑顔のわけ(「〇〇のコンサートがある」の部分)を変えて、いくつか例を示す。

- ③ 「なんだか、うれしそうですね。どうしたんですか」という質問は固定し、学習者が満面の笑顔のわけを考えて会話練習を行う。この際、「どうしたんですか」と質問する者がドアを取り出して、そこに満面の笑顔の絵を貼り付け、相手に持たせる。そして、ドアの中が気になって中が見たいという素振りをしながら、「どうしたんですか」と問いかける。それに答える学習者は、実際にドアをひらいて中を見せながら、笑顔のわけを述べる。

## 6 期待される効果

本節では、4節、5節で示した提示方法がどのような効果をもたらしうるか、期待される効果について考察したい。

### 6.1 ノダのおおまかなイメージが体感できる

2節で、学習者にとってはノダの用法解説を的確に捉えることが難しいことを指摘した。ある文型を用法ごとに整理し、それを言葉で解説するというプロセスは、特に成人の学習者にはある程度必要である。しかし、用法解説に頼りすぎることによる弊害もある。(2) のような例に対して、「これは理由ではない」と悩んでしまう学習者がいるというのもその一例である。ドアのメタファーは、「何々用法」と分類される前のノダのおおまかなイメージを提示する。そのため、用法解説に頼りすぎない理解を促すことができ、言葉による用法解説の限界を補うことができる。

たとえば、上記の練習例Aでは、実際に「ドアをひらいて中を見せる」という動作を行いながらノダ文を発する。これにより、学習者は、「ドアの後ろにある、明らかになっていない事態を種明かしする」というノダの感覚を、体の動きとともに体感する。さらに、練習例Bでは、「どうしたんですか」という問いかけを、「ドアの中が気になって中が見たい」という素振りとともに発する。これにより、「自分には見えていない既定の事態の存在を気にしつつ、種明かしを求める」というノカ（「～んですか」）の特徴を体感することができる。このように、メタファーを通して、ノダのおおまかなイメージを体感するというプロセスを踏んでおくと、解説用語への過剰な依存が起きにくいと考えられる。

また、練習例Aのような実践を行った教師からは、この練習を通して、まず、「明日、休ませていただけませんか」という用件を述べ、聞き手が「どうのことか」と考えながら、休ませるかどうかの判断基準を探しているところに、すかさずそのわけを述べるという会話のストラテジーが、ノダの意味とともに自然に習得されたようだという指摘もあった<sup>[註12]</sup>。体の動きとともに意味や使

い方を体感するという方法の利点が伺われる。

### 6.2 説明の難しいニュアンスを理解する助けとなる

ノダには「強調」「やわらげ」などと呼ばれる用法があるが、学習者がこのようなニュアンスを的確に捉えることは難しく、(3) のように不自然な使用も見られる。ドアのメタファーは、このようなニュアンスを伝える際にも、言葉による解説を補うものとなりうる。

そもそもノダが「強調」と「やわらげ」という一見正反対の表現効果を実現するのはなぜだろうか。「まだ明らかになっていない既定の事態が存在する」という意識を下敷きにして述べるという述べ方は、事実と認識との間にギャップがあるという「認識のギャップ」(藤城2007)への意識を示唆する。藤城(2007)は、この「認識のギャップ」の受け止め方が状況によって異なってくることを指摘し、ギャップの受け止め方の違いによって、ノダの表現効果にも違いがでてくるとしている。

藤城(2007)は、ノダによる「強調」は、「認識のギャップ」が本来あってはならないものと想定される状況で実現されるとする。当該の事態を十分に認識していて当然なのに、その当然の認識が十分にできていないという状況では、「認識のギャップ」への意識を示すことが、「私は「あなたが認識していて当然の事態を十分に認識していない」という「認識のギャップ」を意識している。あなたも、このギャップを自覚して、十分な事態認識をしてほしい」という態度の表れとなり、これが「強調」という表現効果を生む。たとえば、次の(8)では、「人ひとりが死んでいる」という重大事を十分に認識していないかのような聞き手を前に、「十分に認識して重く受け取るべき事態を、あなたはちゃんと認識していない」という「認識のギャップ」への意識を示しており、これが、「このギャップを自覚して、人が死んでいるという事態を十分に認識してほしい」というメッセージとなっている。

(8) 犀川「あんたねえ、人ひとりが死んでるんだぞ！」 (『サイコ』第1話)

本稿では、これに加え、「認識のギャップ」の大きさがインパクトを持つ場

合にも、ギャップへの意識表明が、そのギャップの持つインパクトへの意識表明となり、「強調」のニュアンスを生むと考える。

(9) (水虫の症状を示すページで) なんと顔にもできるんです! (『水虫』)

また、藤城(2007)は、「告白」「やわらげ」のような用法について次のように説明している。聞き手が事態を認識していないことが当然であるような場合には、「認識のギャップ」への意識を示すことが、「あなたがこれを知らないことは分かっています。意外でしょうが、聞いてください」といった「認識のギャップ」への配慮として働く。これが「告白」「やわらげ」などの効果を生む。当該の事態が聞き手に負担を与えることであったり、切り出しにくいことである場合はなおさらである。

(10) 楷「実は、洗淨強迫なんです。……私のことです」 (『サイコ』第10話)

以上から、ノダによる「強調」を動機づけるのは、(3)のような「とても楽しかったから強く言いたい」という楽しさの度合いではなく、「ギャップを強く意識しているからこそ強く言いたい」という気持ちであることがわかる。これをドアのイメージに重ねると、図5のように、「このギャップを意識してよく見ろ」とばかりに、聞き手の目の前で大きくドアをひらき、事実を突きつけるようなイメージとなる。

(3)の場合、話者が強調という効果を求めたのは「認識のギャップ」を意識しているためではない。したがって、図5のようにドアの中の事実を聞き手に突きつけ、「認識のギャップ」の大きさ、重大さを知らしめたという気持ちがあるわけではない。それにもかかわらず、強く言うためにノダを用いているところに不自然さがあると考えられる。

このようなイメージを提示する際、筆者は共起表現との関係を示すようにしている。たとえ



図5 「強調」のノダのイメージ

ば、(8)のようなタイプの「強調」では、「認識していて当然のことを十分に認識していないからこそ強く言いたい」という動機を反映する共起表現として、「わからないんですか?」「わかってくださいよ」「だから(言ってるでしょう)」などが挙げられる。一方、(9)のようなタイプの「強調」は、「聞き手にとって全く想定外のことだ」という意識を表す「なんと」などの表現と共起する。これらの表現を伴いうるかどうかはノダの自然さの判断材料となるため、これらの表現とともに図5のイメージを提示すると、よりの確な理解が得られる。

また、「強調」とは逆に、「やわらげ」は、遠慮がちにおそるおそるドアをひらくイメージで捉えることができ、「実は」など、「相手が知らない」ということへの意識や配慮を表す表現と共起しやすい。

### 6.3 様々な用法に共通するイメージが得られる

ドアのメタファーを通して、体の動きとともにノダのおおまかなイメージを体感しておくことは、後に様々な用法に出会ったときの助けともなる。ノダには、「理由」「説明」「強調」「やわらげ」のほかにも、「前置き」「教示」「発見」「意志・決意」「命令」など、様々な用法が指摘されている。これらの共通点は学習者には見えにくいですが、ドアのメタファーは、これらの用法に共通するイメージを提供することができる。ここでは、周辺的な用法として特別扱いされることが多い「発見」の用法について考えていきたい。

なお、本稿はこれらの用法を授業で扱うべきだと主張するものではない。ここでの目的は、学習者がノダの多様性とまどっている場合に、ドアのイメージが理解の助けとなりうることを示すことにある。

(11) 東京駅までいき、出張先の地図を見ようと駅の案内図を見ると、偶然に、本当に偶然に、  
「B6出口…信越化学工業」  
へー。信越化学ってこんなところにあったんだ! (『LOGI』)

(11) は一般に「発見」と呼ばれる用法である。「B6出口…信越化学工業」という案内表示を目にしたことをきっかけに、「信越化学の所在地について、

これまで明らかになっていなかった既定の事態が存在していた」という気づきが生まれる。この気づきと同時に、「その既定の事態とはどういうものか」という、「信越化学がこんなところにあった」という種明かしが話者の中で起こったこと、それによって新たな認識が生まれたことが、ノダによって表されている。

これをドアのイメージで捉えると、「信越化学工業」という表示を目にした時点で、これがヒントとなり、隠れた未知の事態の存在を示すドアが出現したと考えられる。話者はこのドアを開け、ヒントの裏側にある「(信越化学が)こんなところにあった」という事態を自ら見出す。これが「発見」である。

このように、「発見」のような用法は、一見「理由」「説明」とはかけ離れているが、ドアのイメージをつかんでおくことで、これらを統一的なイメージで捉えることが可能になる。

ノダは超上級レベルの日本語学習者にとってもなかなか習得しきれない項目だが、ドアのイメージに対して、超上級レベルの学習者から「このようなイメージを持つことは、今後ノダを理解したり、使用したりする際に、一種のフィルターのような役割を果たしてくれると思う」というフィードバックが得られた。おおまかなイメージを提示するという方法の利点は、まさにこのようなところにあるのではないだろうか。

## 7 まどめと今後の課題

本稿では、日本語学習者にノダの意味・機能を提示する際にドアのメタファーを用いるという方法を提案した。また、この方法に期待される効果について

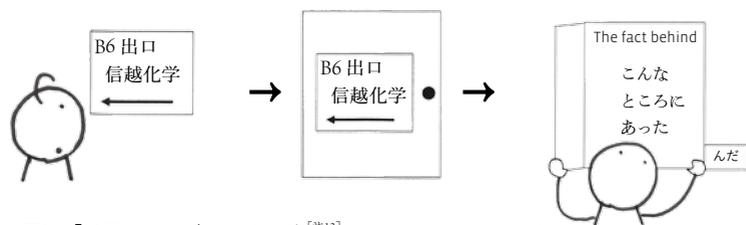


図6 「発見」のノダのイメージ [註13]

考察し、①ノダのおおまかなイメージが体感できる、②説明の難しいニュアンスを理解する助けとなる、③様々な用法に共通するイメージが得られるという3つの利点を挙げた。これらは、日々の授業で実感してきた効果であり、学習者や非母語話者の実際の反応に基づいて導き出したものではあるが、十分な検証ができていないわけではない。効果の検証については、今後の課題としたい。

なお、本稿は、メタファーによる意味・機能提示が最良の方法だと主張しようとするものではない。むしろ、言葉による用法解説を補う一手段として提案したい。本稿で提案した方法を含め、様々な提示方法や練習方法の引き出しを用意しておくことが、それぞれの学習者に合った方法を見出していく際の助けとなるのではないだろうか。

〈大月短期大学〉

### 注

- [注1] …… たとえば、「あの人はアメリカ人ですが、英語が話せないんです。」がそのままごく自然な発話であるのに対し、「あの人はアメリカ人ですが、英語が話せるのではありません。話せないんです。」という発話は、特定の状況を要求する。
- [注2] …… 後に続く文章によっては、ノダが自然な場合もあるが、(1)は作文全体を読んだ上で、ノダが不自然だと判断された例である。
- [注3] …… 名嶋 (2004) は、学習者には、ノダを「限られた個別の表面的用法で理解している」という傾向が見られること、その中でも、ノダを「強調」または「説明、因果関係」と捉えている学習者が多いことを指摘している。
- [注4] …… 例文中の下線はすべて引用者による。
- [注5] …… ここで言う「既定の事態」は、既に成立した事態に限らず、今後起こることが決まっていると話者が想定する事態も含む。
- [注6] …… 「種明かしをする」だけでなく、「種明かしを求める」、「種明かしをすることでどのようなものであるかを探ろうとする」、「話者自身の中で種明かしが起きたことを示す」ことなども含む。
- [注7] …… 「背後の事情」を表す用法では、事態 $\alpha$ の「背後の事情」として事態 $\beta$ が示され、ノダ文で表される。
- [注8] …… ノダが示す「認識のギャップ」への意識と、この「認識のギャップ」への意識を示すことによる効果については、藤城 (2007) が論じている。詳しくは藤城 (2007) を参照されたい。

- [注9] …… 媒介語として、ある程度の英語が使用できるクラスを想定し、説明の一部に英語を用いている。
- [注10] …… 話者が聞き手に中を見せるとは限らず、たとえば、問いかけの文では、話者が「中を見せてほしい」という態度で問いかけることを表す。
- [注11] …… マグネットシートや着脱可能な粘着剤などを使用するとよい。
- [注12] …… 早稲田大学日本語教育研究センター 2009年度春学期、総合日本語（標準）2クラスの授業にて、図3のような絵を使って練習を行った遠藤直子氏からいただいた指摘である。
- [注13] …… ただし、ドアのイメージを体感している学習者の場合、このような絵を用いずとも、ドアを開けて中の事態を新たに認識したというジェスチャーを見せるだけで、発見のニュアンスが伝わることが多い。

## 参考文献

- 今村和宏 (2007) 「のだ」の発話態度の本質を探る—「語りかけ度」と「語りかけタイプ」『一橋大学留学生センター紀要』10, pp.37-48.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 名嶋義直 (2004) 「ノダの意味・機能」に関する「学習者のメタ文法認知—東北大学留学生における予備調査の結果から—」『日本語教育論集』13, pp.41-49. 姫路獨協大学大学院言語教育研究科
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から』
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 藤城浩子 (2007) 「ノダによる「強調」「やわらげ」の内実」『日本語文法』7(2), pp.171-187. 日本語文法学会
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院
- 渡辺ゆかり (1994) 「命令を表す動詞の選択するヲ格補文と「の」、「こと」」『ことばの科学』7, pp.89-103. 名古屋大学言語文化部
- 筑波ランゲージグループ (1991) 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME ONE: NOTES』凡人社
- レイモンド・W. ギブズJr. (2008) 『比喩と認知—心とことばの認知科学—』研究社

用例の出典（『 』内は本文中での略称）

- 伴一彦「サイコドクター」(<http://www.plala.or.jp/ban/psy00.html>) 『サイコ』
- 「水虫の症状と治療法」([http://mizumusi.jahra.biz/mizumusi\\_wiki/face.html](http://mizumusi.jahra.biz/mizumusi_wiki/face.html)) 『水虫』
- 「LOGIKABU」([http://logikabu.com/archives/2005/12/post\\_70.html](http://logikabu.com/archives/2005/12/post_70.html)) 『LOGI』